

森本あんり著

## アジア神学講義

グローバル化するコンテクストの神学

A五判・二三四頁・本体三八〇〇円

二〇〇四年五月・創文社刊

## 宮本 憲

アジア固有の神学形成の必要性が自覚されるようになったのは一九六〇年代であり、特に一九六六年に香港で開催されたEACC(東アジア・キリスト教協議会)信仰職制協議会において、現代アジアの歴史的状況に回答する「告白神学」の必要性が叫ばれた時にさかのぼる。一九七〇年代初頭には「文脈化」という概念が登場し、以後、アジア社会のリアリティを強く意識した「文脈化神学」(または「状況神学」)の試みが、EACCの後身CCA(アジア・キリスト教協議会)などエキュメニカル運動に関わるアジア人神学者たちの手によって進められてきた。この新しい神学運動を「アジア神学」と呼ぶが、既に三十年以上に及ぶ蓄積がある。アジアではキリスト者は少数派ではあるが、この地域に固有の文化的豊かさ・多様性を反映して、未

だ試行錯誤の途上とはいえ、今日の世界的な文脈化神学の試みの中で決して無視できない重要な流れとなっている。

このようなアジア神学の動向に関心を持つ日本の読者が従来皆無であったとは思えないが、残念ながらほとんど紹介されてこなかったのが実情だ。キリスト教書店を訪れると、日本の全人口に対するキリスト者の割合に比して何と多くの書物が並べられているのか、いつも驚かされるが、アジアの神学に関する書物は確かに極めて少ない。アジア神学がこれまで実質二流扱いされ、正當に評価されず、アジアの神学者たちの提起する多くの重要な問題も真正面から受け止めてこられなかった事実をはつきりと物語っている。森本あんり氏の手になる本書はそのような状況に新たな風穴を開ける価値ある仕事であり、氏に

にある陰陽思想をキリスト教に適用し、三位一体論を再解釈することである(第四章)。著者は各神学者に一章を割き、注意深い分析と批判的応答を試みている。

太平洋神学校で教鞭をとるC・S・ソン、数年前ニューヨークのユニオン神学校を退職した日本人神学者の小山晃佑、北朝鮮に生まれ、ニュージーランド州のドルー神学校で教えたジョン・ユン・リーの四人で、うちバクのみが戦後生まれ、リーのみが故人である。四人ともアジア人ではあるが、長く米国に住み、主に英語で著述活動を行っている事実は覚えておいて良い。

アジアの神学は多様極まりないアジアの社会・文化・宗教だけでなく、これらと深く絡み合った神学者個人の経歴にも多かれ少なかれ規定される。それ故、中心的な関心やテーマも神学者によってまちまちである。これは四人についても言えることで、バクの場合は、もっぱら加害者サイドの概念であった「罪」を、韓国民衆の心に根差した「恨」概念の導入によって補完しようとする(第一章)。ソンは欧米の伝統的の神学を拒否し、アジアの民衆の物語を通して彼らの側に立つ神学を構築しようとする(第二章)。日本の敗戦を原体験として持つ小山は、富士山型宗教とシナイ山型宗教の間の「創造的な双方交通」という手法によって、それぞれの宗教文化を偶像崇拜という視点から批判する(第三章)。リーの関心は、東アジアの宇宙論・人間論の根幹

心から感謝したい。

現在ICUで教鞭をとっておられる森本氏は、米国プリンストン神学校でジョンナサン・エドワーズ研究によって学位を取得され、その後、多元主義や諸宗教など今日の教会を取り巻く諸問題の神学的解明に関する仕事をしておられる。アジア神学に関する今回の仕事は、母校プリンストン神学校で客員教授として二〇〇二年秋学期に担当された講義に由来するとのことであり、書名がアジア神学「講義」とされているのはそのためである。

さて、アジアと呼ばれる世界は広大であり、そこには実に多くの文化・宗教・民族・言語が存在する。たとえば、ヒンズー的・イスラムの南アジアと儒教的・仏教的東アジアとの間には大変な違いがあり、一口に「アジア神学」といっても、異なる文化環境を背景とするものを単純に比較考察することは不可能に近い。従って、何らかの自己限定が必要となる。本書で著者は東北アジアに自己限定し、そこから、「英語圏でよく議論されていながら日本ではほとんど知られていない」(一五頁)四人の神学者を選んで、その神学を詳細に吟味検討している。それは現在オハイオ州の合同神学校で教える韓国出身のアンドルー・バク、台湾に生まれ、現在はバークレーの

序章および結章では、アジア神学や文脈化神学に関する著者自身の洞察が述べられている。問題提起という性格が強いが、これは著者自身が「あとがき」で「本書は、問題領域の発見と設定と明確化を第一義的な任務」(二二七頁)としていると述べている通りである。

神学と伝統の関係、正統性の問題、シンクレティズムなど様々な問題が論じられ、読者はこれを通して、周辺ののであるかに思えるアジア神学が実はキリスト教神学にとって中心的・本質的な諸問題を提起しており、ロマンチストでない限り、避けて通ることのできないものだということを悟るのである。ついでながら、序章ではプリンストンでの著者のゼミ風景が詳しく紹介されているが、評者自身のプリンストンでの日々が思い出されて懐かしかった。ゼミで著者が学生に課した問いとそれに対する彼らの応答とその分析を読むことによって、神学的思考がいかに文脈的性格を持つているかを具体的に感じ取ることができ、非常に効果的な序章だと思つた。

神学者は皆米国に住み、英語で生活し仕事をしている。もちろん、アジア人神学者の中には、インドの故M・M・トーマスのように国際的に活躍しながらも、あくまで出身地を活動拠点として選ぶ者もいる。しかし、欧米を生活と活動の基盤とする者が多いのは確かである。その結果、彼らの神学の「アジア性」がしばしば問われることになる。私事で恐縮であるが、評者もプリンストンで学び、トーマスとソンをアジアのエキュメニズムの文脈の中で比較考察する学位論文を書いた。長時間のデイフェンスの終わり近く、出席した教授の一人から、何故ソンは台湾民主化後も母国に帰らず米国に留まったのか、という質問を受けた。在米外国人の評者にはナイーブに聞こえる問いではあったが、その背後には、米国で仕事を続けるソンが自分の神学を「アジア神学」と呼ぶことに対する疑念が透けて見えた。

本書もこの点を十分認識しており、「アジア神学」とは何か、という問いが各所で繰り返されている。これは、「アジア」とは何か、「アジア人」とは誰か、という問いにつながる根源的な問いである。しかし、著者の解答は明快ではなく、「さしあたっては作業概念としての位置づけをそのまましておくのが

賢明であろう」(一九四頁)と結論づけているに過ぎない。けれども、評者はこれに同意できる。確かにアジア神学はこれまで主に西側在住のアジア人によって提唱されてきた。異文化の中に身を置くことによって自分自身のアイデンティティを強く意識するためである。しかし、地域によっては、アジア在住のキリスト者の間からも文脈的な神学形成への取り組みが既に現れているし、そうでない地域であっても今後同様の取り組みが現れるのは間違いない。そのような取り組みの蓄積の中から、アジア神学とは一体何なのかを次第に明瞭になってくるに違いないと思う。現時点では「アジア神学」の定義は流動的である。そうでなくともアジアは多様な文化や複雑な歴史を持つ広大な世界なのだ。その上、近代化やグローバル化の中で現在も絶えず変動を続けている。しかし、ただひとつだけ、冒頭に述べたように、アジアのエキユメニカル運動との関わりの中から生まれてきた神学運動であるという点は留意しておいて良いのではないだろうか。

次に、陰陽思想のキリスト教への適応をめざすリーによれば、キリストに従うとは「自分の力で何かを成し遂げるのではなく、自分の意志を捨て、自分を変化に委ね切り、変化

そのもの主であるキリストと合一することによって、事を成す」(二六〇頁)ことである。これに続けて著者は「ここには、いかにも東洋的な智慧の真骨頂が発揮されている(同上)」とコメントしている。だが、そうだろうか。キリスト教の場合も、東方正教やローマ・カトリックの観想型修道思想にこれに近い考え方が存在するではないか。確かに神秘主義を嫌う傾向があるプロテスタント神学にはなじみの薄い考え方もかもしれないが、東洋のみならず、西洋にとっても古代までさかのぼる重要な伝統のほずである。さらに、神が「不可知の神秘(一四二頁)であるというリリーの神学的前提は、偽ディオニシオスや「不可知の雲」などの否定神学と共通である。本書でこのようなキリスト教神秘思想への言及がないのは何故だろうか。リー自身がプロテスタントだとしても、これらとの比較をも経た方が彼の神学をより良く理解・評価できるのではないだろうか。もちろん、それは神秘主義自体の評価にも左右されるだろうが、欧米のキリスト教の伝統を乗り越えようと試みるアジア神学を論じる場合、従来の教派的伝統の枠組みを越えて、キリスト教会全体をカバーするエキユメニカルな視点からものを見る必要があるのではないだろうか。

以上は本書を読んで得た感想のごく一部である。示唆に富んだ中身の濃い書物であり、教えられることも多く、他にも書きたいことがまだまだある。また、「文脈」が本来持っていたはずの「現場性」が本書のような学的・組織神学的アプローチでは蒸発してしまうのではないか、あるいは、神学校というアカデミックな場が文脈化神学にとつてどういう意味を持っているか、などという重大な疑問が残るが、これには批判的な検討が必要であろう。

いずれにせよ、本書をきっかけとしていわゆる「第三世界の神学」若千古びた言葉ではあるが)の意義が、日本でもしっかりと認識されるようになることを期待したい。アジアの神学をより良く知るためには、本書で意図的に除外された南アジア系の神学の紹介も必須である。更に、それらの通時的研究もなされなければならない(もうひとつ欲を言えば、アジアを越えてアフリカの神学の紹介も望ましい)。このような作業を通して、日本の神学が真の意味でグローバルな視野と問題意識を持つようになることを願わずにはいられない。

(みやもと・けん 神戸松蔭女子学院大学教授)